

木菟俗見

泉鏡花作

全一章

苗賣なへうりの聲こゑは、なつかしい。

．．．．．垣かきの卵うの花はな、さみだれの、ふる屋やの
軒のきにおとづれて、朝顔あさがほの苗なへや、夕顔ゆふがほの苗なへ

またうたに、

．．．．．田舎あなかづくりの、かご花活はないけに、づつぷ
りぬれし水色みづいろの、たつたを活いけし樂たのしさは、心こゝろの憂う
さもどこへやら

小うたの寄せ本よほんで讀よんだだけでも、一寸意氣ちよつといきだ、
どうして悪わるくない。が、四疊半よてふはんでも、六疊ろくでふでも、琵琶び
琶は棚たなつきの廣間ひろまでも、そこは仁體相應にんたいさうおうとして、これ
に調子てうしがついて、別嬪べつびんの聲こゑで聞きかうとすると、三味さみせ
線の損料そんれうだけでもお安やすくない。白しろい手ての指環ゆびわの税ぜいが
かゝる。それに、われら式しきが、一念發起いちねんほつきに及およんだほ

どお小遣を拂いて、羅の褌に、すツと長じゆばんの
模様が透く、・・・水色の、色氣は（たつた）
で・・・斜に座らせたとした所で、歌澤が何
とかで、あのはにあるの、このはないのと、淺間
の灰でも降つたやうに、その取引たるや、なか／＼
むづかしいさうである。

先哲いはく・・・君子はあやふきに近よらず、
いや頼杖で讀むに限る。・・・垣の卯の花、さ
みだれの、ふる屋の軒におとづれて・・・か。

悪いことは申さぬ。これに御同感の方々は、三味
線でお聞きになるより、字でお讀みになる方が無事
である。――

下町の方は知らない。江戸のむかしよりして、こ
れを東京の晝の時鳥ともいひたい、その苗賣の聲は、
近頃聞くことが少くなつた。偶にはくるが、もう以
前のやうに山の手の邸町、土べい、黒べい、幾曲り
を一聲にめぐつて、透つて、山王様の森に響くやう
なのは聞かれない。

久しい以前だけれども、今も覚えて居る。一度は本郷龍岡町の、あの入組んだ、深い小路の眞中であつた。一度は芝の、あれは三田四國町か、慶應大學の裏と思ふ高臺であつた。いづれも小笠のひさしをすゑ、脚半を軽く、しつとりと、拍子をふむやうにしつゝ聲にあやを打つてうたつたが・・・うたつたといひたい。私は上手の名曲を聞いたと同じに、十年、十五年の今も忘れないからである。

この朝顔、夕顔に續いて、藤豆、隠元、なす、さげ、唐もろこしの苗、また胡瓜、糸瓜、令嬢方へ愛相に（お）の字をつけて、お南瓜の苗、・・・と、砂村で勢ぞろひに及んだ、一騎當千前栽の強者の、花を頂き、蔓手綱、威毛をさばき、装ひに濃い紫を染などしたのが、夏の陽炎に幻影を顯はすばかり、聲で活かして、大路小路を縫つたのも中頃で、やがて月見草、待よひ草、くじやく草などから、ヒヤシンス、アネモネ、チウリップ、シクラメン、スギトピイ。笛を吹いたら踊れ、何でも舶來ものの苗を並べること、尖端新語辭典のやうになつたのは最近で、いつか雑曲に亂れて來た。

決して悪くいふのではない、聲はどうでも、商賣は道によつて賢くなつたので、この初夏も、二人づれ、苗賣の一組が、下六番町を通つて、角の有馬家の黒塀に、雁が歸るやうに小笠を浮かして顯はれた。

—— 紅花の苗や、おしろいの苗 —— 特に註するに及ぶまい、苗賣の聲だけは、草、花の名がそのまゝでうたになること、波の鼓、松の調べに相ひとしい。床の間ものの、ぼたん、ばらよりして、缺摺鉢、たどんの空箱の割長屋、松葉ぼたん、唐辛子に至るまで聲を出せば節になる。むかし、下の句に（それにつけても金の欲しさよ）と吟ずれば、前句はどんなでもびつたりつく。（ほとゝぎすなきつるかたをながむれば） —— （それにつけてもかねのほしさよ、） —— 一寸見本がこんなところ。古池や、でも何でも構はぬ、といった話がある。もつともだ。うら盆で餘計身にしみて聞こえるのと、卑しいけれども、同じであらう。

その・・・ —— 紅花の苗や、おしろいの苗 ——

小うたなるかな。ふる屋の軒におとづれた。何、
座つて居ても、苗屋の笠は見えるのだが、そこは凡
夫だ、おしろいと聞いたばかりで、破すだけ越に乘
だして見たのであるが、續いて、

―― 紅鶏頭、黄鶏頭、雁來紅の苗。・・
・とさか鶏頭、やり鶏頭の苗 ー ー

と呼んだ。繪で見せないと、手つきや口の説明で
は、なか／＼形が見せられないのに、この、とさか
鶏頭、やり鶏頭は、いひ得てうまい。・・・・學
者の術語ばなれがして、商賣によつて賢しである、
と思つたばかりは二人組かけ合の呼聲も、實は玄米
パンと、ちんどん屋、また一所になつた。・・・
どぢやう、どぢやう、どぢやう ー ー に紛れたの
であつた。こちらで氣をつけて、聞迎へるのでなく
つては、苗賣は、雑音のために、どなたも、一寸氣
がつかないかも知れぬと思ふ。

まして深夜の鳥の聲。

その2

俳諧には、冬の季になつて居たはずだが、みづづ
くは、春の末から、眞夏、秋も鳴く。．．．と
もすると梅雨うちの間頃が、あの、忍術つかひ得意
の時であらうも知れぬ。魔法、妖術、五月暗にふさ
はしい。．．．よひの間のホウ、ホウは、あれ
は、夜鷹だと思はれよ。のツホウホー、人魂が息吹
をするとかいふ聲に、藍暗、紫色を帯して、のりす
れ、のりほせのないのは木菟で。．．．大抵眞
夜中の二時過ぎから、一時ほどの間を遠く、近く、
一羽だか、二羽だか、毎夜のやうに鳴くのを聞く。
寝ねがての夜の慰みにならないでもない。

一、陽氣の加減か、よひまどひをして、直き町内の大
一、ポプラの古樹などで鳴く事があると、梟だよ、

あゝ可^こ恐^{おそ}い。．．．．私^{わたし}の身^{しん}邊^{へん}には、生^{あひ}にくそんな新^{しん}造^ぞは居^あないが、とに角^{かく}、ふくろにして不^ふ氣^き味^みが。がふくろの聲^{こゑ}は、そんな生^な優^ましいものではない。

――相^{さう}州^{しゅう}逗^づ子^しに住^{すま}つた時^{とき}、秋^{あき}もややたけた頃^{ころ}、雨^{あめ}はなかつたが、あれじみた風^{かぜ}の夜^よ中^{なか}に、破^あ屋^はの二^{にか}階^いのすくその欄^{らん}干^{かん}と思^{おも}ふ所^{ところ}で、化^ばけた禪^{ぜん}坊^{ぼう}主^{しゅ}のやうに、恫^{どう}喝^{かつ}をくはしたが、思^{おも}はず、引^ひき息^{いき}で身^み震^{ふる}ひした。唐^{たし}突^{ゆけ}に犬^{いぬ}がほえたやうな凄^{すさ}まじいものであつた。

だから、ふくろの聲^{こゑ}は、話^{はな}に聞^きく狼^{おほ}か^かむなるのに紛^まれよう。．．．．みづくの方は、木^こ精^{だま}が戀^こをする調^{てう}子^しだと思^{おも}へば可^いい。が、いづれ魔^まものに近^{ちか}いのであるから、又^{また}ばける、といはれるのを慮^{おも}んばか、内^{ない}々^{／＼}遠^{えん}慮^{りよ}がちに話^{はな}したけれども、實^{じつ}は、みづくは好^すきである。第^{だい}一^{いち}形^{かたち}が意^い氣^きだ。――聞^ね、いや、寢^ね床^どの友^{とも}の、――源^{げん}語^ごでも、勢^{せい}語^ごでもない、道^{だう}中^{ちゅう}膝^{ひざ}栗^り毛^{りげ}を枕^{まくら}に伏^ふせて、どたりとなつて、もう鳴^なきさうなものだと思^{おも}ふのに、どこかの樹^きの茂^{しげ}りへ顯^{あら}はれない時^{とき}は、出^で来るものなら、内^{ない}懐^ひに隻^{せき}手^{しゅ}の印^{いん}を結^{むす}んで、屋^やの棟^{むね}に呼^よびたい、と思^{おも}ふくらみである。

へ行く途中、海の底を見るやうな岩の根を抜ける
道々、傍の小沼の蘆に、くわらくわいち、くわらく
わいち、ぎやう、ぎやう、ぎやう、ちよツ、ちよツ、
ちよツ……を初音に聞いた。

まあ、そんなに念いりにいはいなくても、凡鳥の勘
左衛門、雀の忠三郎などより、鳥でこのくらゐ、名
と聲の合致したものは少からう、一度もまだ見聞き
した覚えのないものも、聲を聞けば、すぐ分る

ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎ
やうし、ぎやうぎやうし。

もし／＼、久保田さん、と呼んで、こゝで傘雨さ
んにお目にかゝりたい。これでは句になりますまい
か。

ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎ
やうし。

顔と腹を横に揺つて、万ちゃんの「折合へません」が目に見える。

加賀の大野、根生の濱を歩いた時は、川口の洲の至る所、蘆一むらさへあれば、行々子の聲が渦を立てた、蜷の居る渚に寄れば、さら／＼と袖ずれの、あしのもとに、幾十羽ともない、くわらくわいち、くわらくわいち、ちよツ、ちよツで。ぬれ色の、うす紅らんだ莖を傳ひ、水をはねて、羽の生えた鮒で飛回る。はら／＼と立つて、うしろの藁屋の梅に五六羽、椿に四五羽、ちよツちよツと、旅人を珍しうに、くちばしを向けて共音にさへづつたのである。――なじみに成ると、町中の小川を前にした旅宿の背戸、その水のめぐる柳の下にも来て、朝はやくから音信れた。

その3

・ ・ ・ ・ 次手に、おなじ金澤の町の旅宿の、料理
人に聞いたのであるが、河蝉は麴を恐れない。寧ろ
知らないといつても可い。庭の池の鯉を、大小計つ
てねらひにくるが、仕かけさへすれば、すぐにかゝ
る。また、同國で、特産として諸國に貸する、鮎釣
の、あの蚊針は、すごいほど彩色を巧に昆虫を模
して造る。針の稱に、青柳、女郎花、松風、羽衣、
夕顔、日中、日暮、螢は光る。

(太公望) は諷する如くで、殺生道具に阿彌陀
は奇なり。 ・ ・ ・ ・ 黒海老、むかで、暗がらす、
と不氣味になり、黒虎、青蜘蛛とすごくなる。就中、
ねうちものは、毛巻におしどりの羽毛を加工するが、
河蝉の羽は、職人のもつとも欲するところ、特に、
あの胸毛の火の燃ゆる緋は、魔の如く魚を寄せる、
といつて價を選ばないさうである。たゞ斷つて置く
が、その揺る篝火の如き、大紅玉を抱いた彼のをん
なは、四時ともに殺生禁斷のはずである。

さて、よしきりだが、あのおしやべりの中に、得
もいはれない、さびしい情の籠つたのがうれしい。
いふまでもなく番町邊では、あこがれる蛙さへ聞か
れない。どこか近郊へ出たら、と近まはりで尋ねて
も、湯屋も床屋も、釣の話で、行々子などは相手に
しない。ひばり、こま鳥、うぐひすを餌ふ町内名代
の小鳥ずきも、一向他人あつかひで相手にせぬ。ま
さか自動車で、ドライブして、捜して回るほどの金
はなし・・・縁の切れめか、よし原すゞめ、當
分せかれたと斷念めて居ると、當年五月　　房
州へ行つた以前である。

馬鹿の一覺え、といふのだらう。あやめは五月と
心得た。一度行つて見よう見ようで、まだ出かけた
事のない堀切へ・・・急ぎ候ほどに、やがて着
くと、引きぞ煩らはぬいづれあやめが、憚りながら
葉ばかりで伸びて居た。半出來の藝妓　　浅
草のなにがしと札を建てた　　ー　活人形をのぞく
ところを、唐突に、くわら／＼、くわら、と蛙に高
笑ひをされたのである。よしよしそれも面白い。あ
れから柴又へお詣りしたが、河甚の鰻・・・な

どと、贅は言はない。名物と聞く切干大根の甘いにほひをなつかしんで、手製のり巻、然も稚氣愛すべきことは、あの渦巻を頬張ったところは、飲友達は笑はば笑へ、なくなつた親どもには褒美に預からうといふ、しをらしさのおかげかして、鴻の臺を向うに見る、土手へ上ると、鳴く、鳴く、鳴くぞ、そこに、よしきり。

巢立ちの頃か、羽音が立つて、ひら／＼と飛交はす。

あしの根に近づくと、またこの長汀、風さわやかに吹通して、人影のないもの閑かさ。足音も立つたのに、子供だらう、恐れ氣もなく、葉先へ浮だし、くちばしを、ちよんと黒く、顔をだして、ちよ、ちよツ、とやる。根に潜んで、親鳥が、けたましく呼ぶのに、親の心、子知らずで、きよろりとしてゐる。

「おつかさんが呼んでるぢやないか。葉の中へ早くお入りーー人間が居て可恐いよ。」

「人間は飛べませんよ、ちよツ、ちよツ、ちよツ、ちよツ。」

「犬がくるぞ。」

「をぢちゃんぢやあるまいし……」

やゝ長めな尾をぴよんと匆ねた。――こいつ知つて居やあがる。前後左右、たゞ犬は出はしまいかと、内々びく／＼もので居る事を。

「犬なんか可恐くないよ。ちツちツちツ。」

畜生め。

「これ／＼一坊や、一坊や、くわらかいち、くわらかいち。」

それお母さんが叱つて居る。

可愛いこの一族は、土手の續くところ、二里三里、蘆とともに榮えて居る喜ぶべきことを、日ならず、やがて発見した。――房州へ行く時である。汽

車が龜戸を過ぎて　ー　あゝ、このあひだの堤の
續きだ、すぐに新小岩へ近づくと、窓の下に、小兒
が溝板を駈けたす路傍のあしの中に、居る、居る。
ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし。

「をぢさんどこへ。．．．．」
と鳴いて居た。

白鷺が　ー　私はこれには、目覺むるばかり、
使つて居た安扇子の折目をたゝむまで、えりの涼し
い思ひがした。嘗て、ものに記して、東海道中、品
川のはじめより、大阪まはり、山陰道を通じて、汽
車から、婀娜と、しかして、窈窕と、野に、禽類の
佳人を見るのは、蒲田の白鷺と、但馬豊岡の鶴ばか
りである、と知つたかぶりして、水上さんに笑はれ
た。

その4

「少しお歩行きなさい、白鷺は、白金（本家、芝）の庭へも来ますよ。」 つい小岩から市川の間に、左の水田に、すら／＼と三羽、白い褌を取つて、雪のうなじを細りとたゞずんで居たではないか。

のみならず、汽車が千葉まはりに響田・・・を過ぎ、大網を本納に近いた時は、目の前の苗代田を、二羽銀翼を張つて、田毎の三日月のやうに飛ぶと、山際には、つら／＼と立並んで、白い燈のやうに、青葉の茂みを照すのをさへ視たのである。

目的の海岸　――　某地に着くと、海を三方　――　見晴して、旅館の背後に山がある。上に庚申のほこらがある。と聞く。・・・町並、また漁村の屋根を、随處に包んだ波状の樹立のたゞずまひ。あの奥遙に燈明臺があるといふ。丘ひとつ、高き森は、御堂があつて、姫神のお庭といふ。丘の根について三所ばかり、寺院の棟と、ともにそびえた茂りは、いづれも銀杏のこずゑらしい。

・ ・ ・ ・ ・ と表二階、三十室ばかり、かぎの手に
づらりと並んだ、いぬみの角の欄干にもたれて見ま
はした所、私の乏しい経験によれば、確にみづく
が鳴きさうである。思つたばかりで、その晩は疲れ
て寝た。が次の夜は、もう例によつて寝られない。
刻と、巻たばこを枕元の左右に、二嬌の如く侍らせ
つゝも、この煙は、反魂香にも、夢にもならない。
とぼけて輪になれ、その輪に耳が立つてみづくの
影になれ、と吹かしてゐると、五月やみが屋を壓し、
波の音も途絶ゆるか、鐘の音も聞こえず、しんとす
る。

刻限、刻限。

ー のツ、ほッほウ ー

「あゝ、おいでなさい。 今晚は。」

隣の間の八疊に、家内とその遠縁にあたる娘を、
遊びに一人預かつたのと、ふすまを並べてゐる。兩
人の裾の所が、床の間横、一間に三尺、張だしの半
戸だな、下が床張り、突當りがガラス戸の掃だし窓
で、そこが裏山に向つたから、丁どその窓へ、松の

立ちき 立樹の　　ー　　二階にかいだから　　ー　　幹みきがすく／＼と
並ならんでゐる。枝えだの間あひだを白砂はくさのきれいな坂さかが畝うねつて抜ぬ
けて、その丘をかの上うへに小學校せうがくかうがある。ほんの抜裏ぬけうらで、
ほとんど學校がくかうがよひのほか、用ようのない路みちらしいが、
それでも時々とき／＼、ひととほ人通りがある。　　ー　　寝ねしなに女連をんなれん
のこれが問題もんだいになつた。ガラスを通して、ふすまが
松葉越まつばこしに外そとから見みえよう。友禪いうぜんを敷しいた鳥とりの巢すの
やうだ。あら、裾すその方がくすぐつたいとか、何なんとか
で、娘むすめが騒さわいで、まづ二枚折にまいをりの屏風びやうぶで圍かこつたが、尚なほ
隙すきがあいて、燈ひが漏もれさうだから、淡紅とくしほ色の長ながじゆ
ばんを衣桁いかうからはづして、鹿かの子この扱しこき帯いっしよと一所いっしょに、
押おしつくねるやうに引ひっかけて塞ふさいだのが、とに角一寸かくちよつと
媚なまめかしい。

魔まものの鳥とりが、そこを、窓まどをのぞくやうに鳴ないた
のである。　　ー　　晝ひる見たみ、坂さかの砂道すなみちには、青あをすす
き、蚊帳かやつり草くさに、白しろい顔かほの、はま晝顔ひるがほ、目まぶたを
薄紅うすべにに染そめたのなどが、松まつをたよりに、ちら／＼と、
幾いくたりも花はなをそろへて咲さいた。いまその露つゆを含ふくんで、
寝顔ねがほの唇くちびるのやうにつばんだのを、金こん色じきのひとみに且かつ
青あをく宿やどして・・・木菟みづくよ、鳴なく。

が、鳥の事はいはれない。今朝、その朝、顔を洗ったばかりの所、横縁に立つた娘が、「まあ容子のいゝ、あら、すてきにシヤンよ、をぢさん、幼稚園の教員さんらしいわ。」「おつと來たり。」

「お前さんお茶がこぼれますよ。」「知つてる。」と下に置けばいゝものを、満々とあるのを持ちかへようとして沸き立つて居るから振りこぼして、あつゝ。「もうそつちへ行くわ、靴だから足が早い。」「心得た。」下のさか道の曲れるを、二階から突切るのは河川の彎曲を直角に、港で船を扼するが如し、諸葛孔明を知らないか、とひよいと立つて件の袋戸だなの下へ潜込む。「それ、頭が危いわ。」「合點だ。」といふ下から、コツン。

おほゝゝほ。「あゝ、残念だ、後姿だ。いや、えり脚が白い。」といふ所を、シヤンに振向かれて、南無三寶。向直らうとして、又ゴツン。おほほほゝ。で、戸だなを落した喜多八といふ身ではひだすと、「あの方、ね、友禪のふる敷包を。．．．かうやつて、少し斜にうつむき加減に、」とおなじ容子で、ひぢへ扇子の、扇子はなしに、手つきで袖へ一寸舞振。．．．娘の舞振

は、然ることだが、たれかの男振は、みづくより
苦々しい。はッはッはッはッ。

叱！……これ丑満時と思へ。ひとり笑ひは
怪ものじみると、獨でたしなんで肩をすくめる。と、
またしんとなる。

——のッほッほ——五聲ばかり窓で鳴いて、
しばらくすると、山さがりに、ずつと離れて、第一
の寺の銀杏の樹と思ふあたりで、聲がする。第二の
銀杏——第三へ。——やがて、もつとも遠
くかすかになるのが——峰の明神の森であつた。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
5

その5

東京 ー ー 番町 ー ー では、周囲の廣さに、

みづづくの聲は南北にかはつても、その場所の東西をさへわきまへにくい。・・・こゝでは町も、森も、ほとんど一浦のなぎさの盤にもるが如く、全幅の展望が自由だから、瀬も、流れも、風の路も、鳥の行方も知れるのである。又禽類の習性として、毎夜、おなじ場處、おなじ樹に、枝に、かつ飛び、かつ留るものださうである。心得て置く事で・・・はさんでは棄てる蛇の、おなじ場所に、おなじかま首をもたげるのも、敢て、咒詛、怨靈、執念のためばかりではない事を。

・・・こゝに、をかしな事がある。みづづくのあとへ鼠が出る。蛇のあとでさへなければ可い。何のあとへ鼠が出て、ちつとも差支はないのであるが、そのみづづくが窓を離れて、第一のいてふへ飛移つたと思ふ頃、おなじガラス窓の上の、眞片隅、ほとんど鋭角をなした所で、トン、と音がする。・・・續いて、トン、と音がする。女二人

の眠つた天井裏を、トコ、トン、トコ、トン、トコ、トン、トコ、トン。はゝあ鼠だ。が、大げさではない、妙な歩行きかただ、と、誰方も思はれようと考へる。

お互に　ー　お互は失禮だけれど、破屋の天井を出てくる鼠は、忍ぶにしろ、荒れるにしろ、音を引ずつて回るのであるが、こゝのは　ー　立つて後脚で歩行くらい。はてな、じつと聞くと、小さな麻がみしもでも着て居さうだ、と思ふうち、八疊に、私の寝た上あたりで、ひつそりとなる。一呼吸抜いて置いて、唐突に、ばり／＼ばり／＼、びしり、どん、廊下の雨戸外のトタン屋根がすさまじく鳴響く。ハツと起きて、廊下へ出た。退治る氣ではない、迷路を捜したのである。

屋根に、忍術つかひが立つたのでも何でもない。それ切で、第二の銀杏にみゞづくの聲が冴えた。

更に人間に別條はない。しかし、おなじ事が三晩続いた。刻限といひ、みゞづくの窓をのぞくのから、

飛移るあとをためて、天井の隅へトン、トコ、トン、
――三晩めは、娘も家内も三人起き直つて聞いたのである。が、びり／＼、がらん、どん、としても、もう驚かない。何事もないとすると、寢覺めのつれ／＼には面白し、化鼠。

どれ、これを手づるに、鼠を炙さに、きつね、たぬき、大きくいへば、千倉ヶ沖の海坊主、幽霊船でも釣ださう。

如何に、所の人にはわたり候か。――番頭を呼だすも氣の毒だ。手近なのは――閑静期とかで客がないので、私どもが一番の座敷だから――一番さん、受持の女中だが、……そも／＼これには弱つた。

旅館に着いて、晩飯と……お魚は何ういふものか、と聞いた、のつけから、「銀座のバーから来たばかりですからねえ。」――「姉さん、向うに見える、あの森は。」――「銀座のバーから来たばかりですからねえ。」――「うっかりして」「海へ

は何町ばかりだえ。」 「さあ、銀座のバーから来たばかりですからねえ。」 あゝ、修業はして置く事だ。人の教へを聞かないで、銀座にも、新宿にも、バーの勝手を知らないから、旅さきで不自由する。もつとも、後に番頭の陳じたところでは、他の女中との詮衡上、花番とかに當つたからださうである。が、ぶくりとして、あだ白い、でぶ／＼と肥つた肉貫 ー (間違へるな、めかたでない、) ー ー 肉感の第一人者が、地響を打つて、外房州へ入つた女中だから、事が起る。

たしか、三日目が土曜に當つたと思ふ。ばら／＼と客が入つた。中に十人ばかりの一組が、晩に藝者を呼んで、箱が入つた。申兼ねるが、廊下でのぞいた。田舎づくりの籠花活に、一寸 (たつた) も見える。内々一聲ほとゝぎすでも聞けようと思ふと、何うして いとが鳴ると立所に銀座の柳である。道頓堀から糸屋の娘・・・女朝日奈の島めぐりで、わしが、ラバさん酋長の娘、と南洋で大氣焔。踊れ、踊れ、と踊り回つて、水戸の大洗節で荒れるのが、残らず、銀座のバーから来た、大女

の一人藝で。．．．．．酔った、食った、うたつた、踊った。宴席どなりの空部屋へ轉げ込むと、ぐたりと寝たが、したゝか反吐をついて、お冷水を五杯飲んだとやらで、ウイーと受持の、一番さんへ床を取りに来て、おや、旦那は酔つて轉げてるね、おかみさん、つまんで布團へ載つけなさいよ。枕もとの煙草盆なんか、娘さんが手傳つてと、．．．．．あゝ、私は大儀だ。」

「はい。」 「はい。」 と女どもが、畏まると、「翌日は又おみおつけか。オムレツか、オートミルでも取ればいゝのに。ウイ．．．．」 廊下を、づし／＼歩行きかけて、よた／＼と引返し 「おつけの實は何とかいったね。さう、大根か。大根、大根、大根でセー」と鼻うたで、一つおいた隣座敷の、男の一人客の所へ、どし／＼どしん、座り込んだ。 「何をのんびりしてるのよ、あはゝゝは、ビールでも飲まんかねえ。」 前代未聞といつつべし。

その6

宴會客から第一に故障が出た、藝者の聲を聞かないさきに線香が切れたのである。女中なかまが異議をだして、番頭が腕をこまぬき、かみさんが分別した。翌日、鴨川とか、千倉とか、停車場前のカフェーへ退身、いや、榮轉したさうである。寧ろ痛快である。東京うちなら、郡部でも、私は訪ねて行って、飲まうと思ふ。

といつたわけで……さしあたり、たぬきの釣だしに間に合はず、とすると、こゝに當朝日新聞のお客分、郷土學の總本山、内々ばけもの監査取しまり柳田さん直傳の手段がある。直傳が行きすぎならば、模倣がある。

土地の按摩に、土地の話を聞くのである。

「――木菟……木菟なんか、あんなもの
のは……」

いきなり麻がみしもの鼠では、いくら盲人でも付合ふまい。そこで、寝ころんで居て、まづみみづくの目金をさしむけると、のつけから、ものにしない。「直になりませんな、つかまへたつて食へはせずぢや。」

あつ氣に取れたが、しかし悟つた。……嘗て相州の某温泉で、朝夕ちつともすゞめが居ないのを、夜分按摩に聞いて、嘆息した事がある。みんな食つてしまつたさうだ。「すゞめ三羽に鳩一羽といつてね。」と丁と格言まで出来て居た。それから思ふと、みゞづくを以て、忽ち食料問題にする土地は人氣が穩かである。

「からすの方がましぢやね、無駄鳥だといつても、からすの方がね、あけの鐘のかはりになるです、はあ、あけがらすといつてね。時にあんた方はどこですか。東京かね――番町――海水浴、避暑にくる人はありませんかな。……この景氣だ

から、今年ことしは勉強べんきやうぢやよ。八疊はちでぶに十疊じふでぶ、眞新まあたしいの
で、百五十圓ひゃくしじふ愛んの所ところを百ひゃくに勉強べんきやうするですわい。」

大きな口くちをあけて、仰向あふむいて、

「七八九みつき、三月みつきですが、どだい、安やすいもんぢやあ
る。」

家内かないが氣きの毒どくがつて、

「たんと山やまがあります、たぬきや、きつねは。」

「じよ、じようだんばかり、直ねが安やすいたつて、化ばけ
物屋敷ものやしき・・・飛とんでもない、はあ、えゝ、たぬ
き、きつね、そんなものは鯨くじらが飲のんでしまつた、はゝ
は。いかゞぢや、それで居ゐて、二階にかいで、臺所だいどころ一切いっさいつ
き、洗面所せんめんじよも・・・」

喟然きぜんとして私わたしは歎たんじた。人間にんげんは斯その徳とくによる。む
かし、路次裏ろじうらのいかさま宗匠そうしやうが、芭蕉ばせきの奥おくの細道ほそみちの
眞似まねをして、南部なんぶのおそれ山やまで、おほかみにおどさ
れた話はなしがある。柳田やなぎたさんは、旅籠はたごのあんまに、加賀かが
の金澤かなざはでは天狗てんぐの話はなしを聞きくし、奥州飯野川あうしういひのがはの町まちで呼よ

んだのは、期せずして、同氏が研究さるゝ、おかみん、いたこの亭主であつた。第一儼然として絹の紋付を着たあんまだといふ、天の授くるところである。

みづぐくで食を論ずるあんまは、容體倨然として、金貸に類して、借家の周旋を強要する……ど
うやら小金でその新築をしたらしい。

女教員さんのシヤンを覗いて、戸だなで、ゴツンの量見だから、これ、天の戒むる所であらう。

但、いさゝか自ら安んずる所がないでもないのは、柳田さんは、身を以てその衝に當るのだが、私の方は間接で、よりに立つた格で、按摩に上をもませて居るのは家内で、私は寝ころんで聞くのである。ご存じの通り、品行方正の點は、友だちが受合ふが、按摩に至つては、然も斷じて處女である。錢湯でながしを取つても、ばんとうに肩を觸らせた事さへない。揉ほどの手つきをされても、一ちゞみに縮み上る……といつただけでもくすぐつたい。このくすぐつたさを處女だとすると、つら／＼惟るに、

媒^な妁^{かう}人をいれた新^に枕^{まくら}が、一^{いっ}種^{しゆ}の……などは、
だれも聞^きかないであらうか、なあ、みづづく。

鳴^ないて居^ゐる……二^に時^じ半^{はん}だ。……やが
て、里^{さと}見^みさんの真^ま向^{むか}うの大^{おほ}銀^い杏^{てい}へ來^くるだらう。

みづづく、みづづく。苗^{なへ}屋^やが賣^うつた朝^{あさ}顔^{がほ}も、もう
咲^さくよ。

夕^{ゆふ}顔^{がほ}には、豆^{とう}府^ふかな　ー　茄^{なす}子^びの苗^{なへ}や、胡^き瓜^りの
苗^{なへ}、藤^{ふち}豆^{まめ}、いんげん、さげの苗^{なへ}　ー　あしたの
おつけの實^みは

【完】